

正しくあれ、そしてひるむな

上 廣 榮 治
うえ ひろ えい じ

昨年の大震災以来、「絆」とりわけ家族の絆の大切さを改めて考えさせられたという人が多いようです。実は、その兆候は数年前から、すでに現われていたように思われます。そのひとつが「親孝行」という言葉の復権です。

昭和二十年の敗戦で、旧来の道德のすべてが封建的なもの、軍国主義に通じるもの^{ほうむ}として葬り去られて以来、親孝行という徳目も顧みられなくなり、むしろ「親からの自立」ばかりが言われるようになりました。その結果、親に孝行をすることも、親孝行という言葉^{ことば}を口にする^{ことば}ことさえ、「古くさい」とか「照れくさい」と感じるようになったのです。

ところが、ここ数年、「親孝行」に関する本が書店に並びはじめ、特設コーナーまで目につくようになりました。最初に注目された本が『親孝行プレイ』（みうらじゅん著）です。親孝行プレイ、つまり親孝行ごっこです。親孝行は照れくさい、だからはじめは形だけでもいい、心はあとからついてくる、というところからの、恐る恐るのネーミングでした。しかし、これがテレビドラマにもなったのです。

続いて登場したのが『親が死ぬまでにしたい55のこと』（親孝行実行委員会編）です。もはやそこには照れくさいなどというはにかみはありません。「親孝行したときには親はなし」、せめて生きているうちにこれだけのことはしてあげたい、という希望を集めた本です。これはベストセラーになりました。その後、『親孝行大百科』という本まで現われました。

いずれも、親孝行なんて照れくさい。きつかけがつかめない。何をすればいいのかわからない。でも、親には喜んでもらいたい、というニーズに応えた本です。何はともあれ、親孝行の復活は喜ばしいかぎりです。それにしても、昨今では親孝行の仕方さえ、マニュアルに頼らなければわからなくなってしまったというのには驚きます。

親孝行で思い出すのが、かつての五千円札でおなじみの新渡戸稲造（にとべいなぞう）（一八六二—一九三三）の親孝行の勧めです。八十年ほど前、熊本の旧制高等学校で行なった講演で、彼は個人主義がはびこって親孝行が薄れたことを嘆いて、次のようなことを言っています。

諸君の中に親に手紙を書いている人がどれぐらいいるだろうか。私も高等学校の校長をしていたことがあるが、あるとき、新入生を集めて、君たちは東京に来て決して故郷のことを忘れるな。父や母に週に一度、葉書に「今日は天気がい」「雨が降って困ります」と、それだけでもよいから書いて送れ。それに「近頃はリウマチはどうですか」と加えれば、なおさら結構だ、というような話をした。

すると翌日、用務員から、「昨日、寄宿舎から七百五十枚の葉書が投函されました」と報告があった。日頃、親に手紙を出していない証拠である。人に言われたから出すのと、母に手紙を書くことが嬉しいというのでは、どちらが本当の親孝行か……と、新渡戸先生は厳しいことをおっしゃっています。

さらに別の小論（『こんせ今世風の教育』）では、「孝行とは何か」についても簡潔に述べています。

先生は言います。「倫理は議論ではない、実行である」。同様に、親孝行とは何かなどと、あれこれ理屈を並べるよりも、心を落ち着けて、これまで父母が自分のためにしてくれたことを思い出して、「ああ、ありがたかったなあ」と、感謝の涙が一滴こぼれたら、それが親孝行である。親孝行というテーマで五年間かけて一本の論文を書くよりも、一分間で両親の恩を悟るほうが親孝行の道に適っている……。

まことに具体的でわかりやすく核心を突いています。

盛岡藩士の子として生まれた新渡戸稲造は、札幌農学校を卒業し、進学した東京大学を中退すると、アメリカとドイツの大学に留学します。帰国後は、札幌農学校、京都大学教授や、第一高等学校の校長、東京女子大学初代学長などを務め、また国際連盟の事務局次長として、連盟の規約に人種差別的撤廃提案をして支持を集めるなど活躍しました。

新渡戸博士の著書では、英語で書かれた『武士道』が世界的に有名ですが、ほかにも平易で具体的な人生訓を説いたものをはじめ、多くの著書を残しています。なかでも、一九一〇年代に刊行された『修養』『世渡りの道』『自警』という、修養三部作と呼ばれる著作は、当時のベストセラーとなりました。

博士は、修養とは「修身養心」ということだとし、修養の目的は「身と心の健全なる発達を図る」ことであると述べています。つまり、正しく行動できるように体を整え、正しい心を育て上げること、それが修養だということです。まさに「倫理力の錬成」です。

「人の長所を見るのがよい」とも博士は言います。『世渡りの道』から引用しましょう。

「人の欠点はなるべくこれを見逃し、その善い方面を見て、善い動機を察するがよいと思う。こうすればあるいは誤ることもある、あるいは人を買いかぶることもある。しかし誤っても、買いかぶっても、人の長所に頼む方が最後の勝利となる」

他者の善い側面を見ること、それが人間関係を良好なものとし、物事を成就に導く道だということです。このあたりの機微きびについては、日頃から「人の悪をいわず、己の善を語りません」と誓い合い、愛和に励んでおられる皆さんには、改めて解説するまでもないでしょう。

新渡戸博士は「長所を見れば、自然にその人に対する尊敬の念が湧き、礼節を守れるようになる」とも言い、そうして成り立つ善き人間関係こそ、人間生来の「共同生存する性質」である、としています。「共同生存」、すなわち、私たちが目指している、共に支え合う「共生」です。私は、一世紀も前に博士がこのことに着目していたという事実には、瞠目して感動します。

親孝行も共生も、実行、実践があるのみです。とはいえ、何事かを行なおうとして、ためらいひるむ場合もあります。時に怖おじ気けづくのも人の常です。見知らぬ人と対面したとき、大勢の聴衆を前にしたとき、大きな困難に直面したときなどです。

修養を説く人格者であった新渡戸稲造博士でさえ、そうでした。彼は自らを臆病だと告白し、しかし、そのうえで臆病を吹き飛ばす方法も記しています。たとえば人の前に出るときに怖じ気けづいたら、一呼吸入れて、自分の心にやましいところがあるかどうかを自問すればよい、と『自警』に書かれています。

そして博士は「臆病な僕にとつて最も教訓となった」という一つの警句を紹介しています。シェークスピアの『ヘンリー八世』に出てくる「ビー・ジャスト・アンド・ファイアー・ノット（正しくあれ、そしてひるむな）」という言葉です。自分にやましいところがなければ、ひるむ理由はないということです。もちろん、親孝行を照れたり、ためらったりする理由など、どこにもないのです。

私たちが倫理を実践する日々においても、新渡戸博士が自らの教訓とした「正しくあれ、そしてひるむな」という言葉は奮起の糧になる。私はそう確信しています。